

関西学院大学ラグビー部小樋山樹監督×プロサポ独自インタビュー

——はじめに小樋山監督のチーム遍歴について教えてください。

「4歳からラグビーを始めて、26年間ラグビーをやってきました。チーム遍歴としては、関西学院高等部から関西学院大学に進学して、そこから栗田工業で2年間働きながら、ラグビーをしました。その後会社を辞めてトライアウトを受け、2014年から6年間NTTドコモでプレー。2020年3月に引退して、そこからはスポーツフィールドで働きながら、関西学院大学ラグビー部の監督をしている、という感じです。」

——その中で、“デュアルキャリア”や“ラグビーとは別のキャリア”を意識する場面はありましたか？

「プロになるときに意識しました。栗田工業時代は仕事がメインだったので、定時まで働いて、そこから練習って感じだったんですけど、そこから会社を辞めてプロになったとき、競技人生が限られている中で、「引退してから、何をするか」という問いは常に頭のどこかにはあったような感じですね。」

——ラグビー選手の間でのデュアルキャリアに対する意識はどのようなものだったでしょうか？

「元々ラグビー界自体が、働きながらラグビーをすることが一般的な世界で、実際トップリーグの選手であっても、日本人は社員選手として仕事の一環としてラグビーをし、引退後は社員として働くというケースが一般的だったんですけど、最近は日本人選手でもプロ契約の選手が増えてきて、デュアルキャリアや引退後の活動について、ラグビー界としても考え始めているのかなという状況ですね。」

——小樋山監督の栗田工業時代の社会人としての経験が、アスリートとしてのキャリアに活かされていると感じる瞬間はありますか？

「そうですね。栗田工業を辞めて、NTTドコモでプロ選手になった時、結果を残さないと来年の契約がどうなるかわからないという中で、今までは「会社に守られてきた」ということを強く実感しました。また栗田工業時代の、定時まで働いて、そこから練習をして夜12時前に帰宅するという生活から180度変わって、恵まれた環境の中でラグビーだけに専念できるようになったときに、“ありがたい”、“恵まれている”と心から感じました。なので、新卒からトップリーグの恵まれた環境にいる人に比べて、ハードな状況を経験したことで、常に感謝の気持ちを持つという意識が生まれたことは、ラグビー選手として活きたのではない

かと思います。」

——逆にアスリートとしての経験が、会社員としての現在のキャリアに活かされていると感じる瞬間はありますか？

「ラグビーというのは、“主体性”がすごく求められるスポーツなんです。監督は試合中ほとんどハーフタイムにしか指示が出せなかったりするので、基本的には選手たちが自分自身で判断してやっていかないといけない。特に関西学院大学ラグビー部は、昔からフルタイムの監督やコーチ陣がいない“学生主体”が伝統のクラブだったので、そういった意味でも、主体性を学生時代や現役時代に学べたことが仕事に関しても、「自分で考えて動く」という面で、活かされているんじゃないかと感じます。

もう一つは、ラグビーを通して、“チームワーク”や“自分一人じゃ成果は得られない”ことを学べたので、仕事においても周りの人を頼ったり、助けて頂いて、その分自分も何かでお返しできるように頑張っていこうという気持ちで今取り組んでいるのは、やっぱりラグビーで学んだことが活かしているのかなと思いますね。」

——NTT ドコモ時代に 2018 年からグロービス経営大学院でビジネスを学ばれていたとのことですが、ビジネスについて学ばれた経緯や引退後に監督業と並行して、ビジネスマンとしてのキャリアを構築しようとおもった動機やきっかけがあれば教えてください。

「グロービスで学んだきっかけですが、プロになった時から、プロのスポーツ選手として、ラグビーに対する時間の使い方はもちろん、それ以外の時間の使い方もすごく大事だと感じていたので、その時間を有効活用出来ないかと考えていました。そんな時に、たまたまグロービスの卒業生で元ラグビー日本代表の野澤さんの記事を拝見して、そこではじめてグロービスについて知り、興味を持ったので、体験授業を受けてみました。それがすごく面白かったので、半ば直感的に入学を決めました。あとはビジネスマンとしても活躍したいという想いは漠然とあり、ラグビー以外の時間でビジネスの知識を深めていけると感じたので、グロービス経営大学院に通うことにしました。」

——ご自身も株式会社スポーツフィールドさんで業務をしながら、関西学院大学ラグビー部の監督をなされている小樋山監督ですが、日本でデュアルキャリアの構築に成功するアスリートが増えるために、指導者としてどういったことができるとお考えでしょうか？

「難しい質問ですね（笑）そうですね、やっぱり私が一番大事だと思うのは、“自分で決める”ということです。これは監督をやらせて頂いている今も大事にしていることで、監督として大きな道筋や守るべきものは立てますが、自分で納得して選んで出した答えに向か

って自分の力で進んでいくことが大事だと思います。そういう意味でも、高校生、大学生のうちから、色んな人の話を聞いたり、色んな人の記事や本を読んで、見聞を広めたり、自分にはどんな生き方が合っているのか、まずは自分で考えることが必要なんじゃないかと。なので、僕らから出来るアプローチとしては、例えばNTTドコモのプロ選手時代にやっていた「夢授業」というものがあるんですが、小学校とか中学校を訪問して、自分の人生を振り返りながら、学生のみなどと将来の夢について色々話したりする機会がありました。そういうのはすごく良かったのではないかなと思いますね。何か一つでも“自分自身で考えるきっかけ”を与えてあげることが大事なのではないかなと思います。」

——アスリートのデュアルキャリア構築には、“主体性”や“自分で決めること”が大事とのことですが、実際に関西学院大学のラグビー部で“主体性”を鍛えるために行っていることや指導方法などがありますでしょうか？

「大学では1限から5限まで授業があって、特に5限の授業を取ると練習にもなかなか参加できなかったり、参加できても遅れることになったりします。なので、勉学に励むのはむしろ良いことなんですけど、5限の授業を取るなら「なんでその授業を学びたいのか」、「その授業の学びを将来どういう風に活かしたいのか」について私に報告するように、とは言っていますね。これは私がプロでラグビーをやっていたので思うんですけど、人生はラグビーが全てではないんですよ。引退後も人生は続くので、ラグビーを極めるという意識はもちろん持ちつつ、それ以外のことにも視野を広げたり、色んな人に話を聞いたり、会ったりすることが、自分自身の人生を豊かにすることや、結果としてラグビーを極めることにもつながっていくと思うので、そういった部分はこれからも大事にしていきたいですね。」

——「考えるきっかけを与えた上で、その中で自分なりに主体的に行動を起こすのを促す」という感じでしょうか？

「そうですね。ラグビー部として今やっている取り組みでわかりやすいものとしては、“致知¹”を定期的にみんなで読んで、自分自身がどう思ったのかをグループに分かれて発表して、お互いに褒め合ったり、承認し合ったりする場を設けています。例えばそういう機会を持っていることは、考えるきっかけを与えるという意味では一ついい例だと思いますね。」

——先ほどのお話でも、関西学院大学ラグビー部が“学生主体”のチームだとお伺いしましたが、そのチームの特徴が社会人としてのキャリアに活かされていると感じる時はありますか。

¹ 致知…致知出版社が発行している月刊誌。「人間学を学ぶ」がコンセプト。(詳しくは公式HPを参照：<https://www.chichi.co.jp/>)

「関西学院大学ラグビー部では、4年生が中心になってチームを運営するので、これは特に4年生になってから皆感じるのですが、練習メニュー一つ組むにしても、かなり苦労しますし、チームの運営は実際関わってみないとわからない部分も多いので、今まではただただラグビーをやっていたらよかったという視点から、チームを運営することや、チームをマネジメントしていくという視点に広がっていく経験をします。そういう経験をしてから社会人になれたのは、一ついいことかなと思いますね。社会人になってすぐの時は、まずは仕事を覚えるために色んな仕事をやらせて頂くことになると思いますが、いずれは部下を育てたり、チームをマネジメントしていく立場にもなっていくと思うので、同じ仕事をするにしても、“高い視座”を持って取り組むことは大事だと思いますし、それは社会人としてのキャリアにも活かされていくのではないかと感じています。」

——小樋山監督の現役時代を振り返ってみて、ラグビー選手目線で、デュアルキャリアやセカンドキャリア構築のためにどんなサービスがあればよかったと思われますか？

「最近思ったのは、アスリートをしなながら、営業の仕事をスポット的にできるサービスがあったら面白いのではないかということです。というのも、「営業」という仕事は、どんな職種の人でも、どんな業界の人でも、誰もが一度は経験しておいた方が良いと思うんですよね。営業という仕事からは、人との関わり方やどうすれば自分たちのサービスを良いと思って頂けるかなどを学べるので、営業の経験をアスリートが現役時代から積めるサービスがあれば良いのでは、ということは最近考えていました。」

——ラグビー選手の引退後のセカンドキャリアの現状について教えてください。

「プロのラグビー選手に限って言えば、自分で飲食店を始められたり、独立して何かビジネスを興す方がだいたい2~3割程度で、その他の方は一般企業に就職して働かれたりって感じですかね。社員選手の方々は引退後は社業に専念されますが、今までラグビーがメインだった生活から変化して、今後何をすればいいのか、迷われている方も多い印象ですね。ですので、それこそ「人生100年時代のキャリアの考え方」みたいなテーマの講座があれば、プロ選手はもちろん社員選手でも聞きたい内容なのではないかと思いますね。」

——監督就任と現職の会社に入社されたのは同じタイミングでしょうか？

「はい、そうですね。」

——現職を選ばれたのはどういった部分が決め手だったのでしょうか？

「監督をやりながら、自分自身のビジネススキルも積める道が良いなと考えていたので、監督業を優先しつつ、融通を利かせて働けるという条件で仕事を探していました。その中で、スポーツフィールドに相談したところ、スポーツフィールドならその条件で働けるということで声をかけて下さったのが決め手ですね。」

——頭の切り替えも含めて、監督業と並行しての勤務はやはり大変でしょうか？

「もちろん、大変ですね（笑）でも、1年経って慣れてきたというのもありますし、社内の皆さんも良い方ばかりで、すごく良い環境でやらせて頂いているというのはありますね。」

——小樋山監督が、特徴的なデュアルキャリアやセカンドキャリアを歩んでいると思われるアスリートの方はいらっしゃいますか？

「ラグビーではないですが、本田圭佑さんは選手をやりながら色々なことをするという面で、そういった道を切り拓いてくれたのではないかと思いますね。それまで日本では、プロの選手は競技だけをしていればいいというか、競技だけに専念するのが正しいというマインドがあったと思うんですけど、そういうマインドが少しずつ変わっていったのは、本田圭佑さんの影響かな、とは思ったりしますね。」

——ラグビー選手では、本田圭佑選手のような動き方をしていいらっしゃる方はいますか？

「本田圭佑さんみたいかはわかりませんが、例えば元日本代表キャプテンの廣瀬俊明さんは、引退されてから起業されて、ご自身で色々動かれたり、そういう方もいらっしゃるの、これからはそういう方がどんどん増えていきそうな気はしますね。」

——先ほどのインタビューでも、練習以外の時間がアスリートにとって大事というお話がありましたが、私共もそういったところに働きかけて行きたいと言いますか、アスリートとして今すごく頑張っているところと並行して、未来に向けて何か準備をしていくことも大事だよね、ということを伝えたいという想いで会社として取り組んでいます。しかし一方では、今はそうじゃなくて競技だけに集中したいと言われてしまうのではないかという懸念もありまして。実際どういう風に選手の皆さんに寄り添ったり、伝えたりすることで、「そうだな、学んでみようかな」ということにつながりそうか、もし何かヒントであったり、思うことがございましたら、是非アドバイス頂ければと思います。

「そうですね。成功モデル、ロールモデルを示してあげるとか、あとは引退後のリアルなお金のところを見せてあげるとかが良いんじゃないかと思いますね。ちなみに、そういった面でプロサボさんの事業として既に何か支援はされていますか？」

——一部、ですね。何人かの選手とはお付き合いさせて頂いています。その他ですと、今はちょうど JFL のクラブチームの方に何か一緒に出来ることがないか、ご提案させて頂いている状況です。

——最後に、小樋山監督の“監督としての目標”と、“社会人としての目標”をそれぞれお聞かせ願いたいです。

「監督としての個人的な目標は“日本一”です。でもこれは、コーチ陣が何か強制して日本一とかではなく、“学生主体”で彼らが自分たち自身で日本一を掴み取ってほしいと思っています。社会人としての目標はまだまだ漠然としていますが、直近で言うと、資格を取るための勉強をしたり、前から持っていた法人の方も本格的に動かしていこうかなという感じですね。」

——なるほど、ありがとうございます。では、インタビューは以上になります。本日はありがとうございました。

「ありがとうございました。」

